慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	師の回想
Sub Title	
Author	片桐, 庸夫(Katagiri, Nobuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.10 (2009. 10) ,p.134- 135
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	神谷不二先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20091028-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

師の回想

「君の指導は一年間行わないから。その間にどのくらい本を読んだかですべてが決まると思う。」修士課程に進学した四月早々に新研一階の談話室で神谷不二先生からそう告げられました。論客としてご活躍中の先生は、さすがに厳しいというのが私の第一印象でした。

神谷先生が塾に赴任なさったのは、私が四年生になる春でした。当時の私は、池井優先生のゼミでお世話になっておりました。池井先生に大学院に進学したい旨を申しますと、「自分はまだ助教授で、院生の指導教授にはなれない。神谷先生によく頼んでおくから」と言われました。それが神谷先生にご指導いただくことになるきっかけでした。

修士課程の二年目を迎える時に、神谷先生からゼミを手伝うようにと言われました。ゼミは、先生の出席される本ゼミと私が任されるサブゼミとがありました。本ゼミでは、先生の横に私が座り、ゼミ生の報告の評価、学生からの質問の引き出し、質問への返答、それに先生へのコメントを求めること等を行わなければなりませんでした。そのための準備も大変なことでしたが、精神的にはもっと大変でした。それは、本ゼミの度に私が先生に評価される試験を受けさせられているような心境にあったからです。

とはいえ、そんな緊張感のあるゼミの中で得られた何物にも代えがたいこと、換言すれば私にとって貴重な財産となったことは、本ゼミの時の神谷先生の学生に対するコメントや課題等に対する意見を聞かせていただきながら、国際関係を冷静に実証的にみる目を養わせていただく機会を与えられたことです。それは、芸を盗むという表現と通ずるものがあったかと思います。また先生の自らの言論に対する毅然とした姿勢も、研究者の端くれとして自分がどうあらねばならないかについての示唆をいただきました。

私は、神谷先生にレポートや原稿を読んでいただいた、或いはご意見やご指摘をいただいたといった経験がありません。先生は、そういう指導のされ方はなさりませんでした。おそらく他の門下生も同様と思います。いつでしたか、研究職についた門下生が先生を囲んで食事をす

る機会がありました。その際の挨拶の中で、私が「神谷先生のご指導により」云々と型通りの感謝の言葉を述べましたところ、先生が「私は皆さんを指導した覚えはない」とおっしゃいました。私は、そういうストレートな言い方自体が先生らしい誠実さを示すものという印象を抱いた記憶があります。そういった席上で、先生が門下生に向かって世界で通用する人間になるようにとよくおっしゃっておられました。私の場合には、先生の期待に応えるのにはまだ道遠い不肖の弟子で恐縮に思います。

神谷先生は、ゼミ生に対して勉強は勿論、礼儀や振舞等に対しても格別厳しかったと思います。ゼミ生の出した賀状に対しても何かありますと必ず注意なさいました。今の私は、自分のゼミの学生に対してついつい面倒で、先生のように注意を与えておりません。当時は、失礼ながら随分うるさい先生と思ったこともありました。しかし、今日では、先生は学生に対して勉強以外の面でも熱心であったと感心しております。

その神谷先生があまりに唐突に逝去されました。先生をいつまでも鉄人と思っていた私には本心ショックでした。年齢的にも逝去されるにはまだ早すぎます。朝鮮半島情勢をめぐって余人をもって代えがたい歯に衣着せぬ論を展開して欲しいと今もって思います。しかし、現役の研究者として机の上に認めたばかりの原稿を残されたまま逝去されたことは、先生の最期の美学的表現であったのだと自分に言い聞かせております。

神谷先生。長いこと筆舌に尽くせぬご指導とお世話をいただきありがとうございました。衷心よりお礼を申し上げますとともに、ご冥福を祈念申し上げます。

群馬県立女子大学大学院
国際コミュニケーション研究科長　片桐庸夫